

みる つくる
がたる

2003

VOL.30
NO.1 (通巻87号)

ART NEWS 千葉県立美術館

ごあいさつ

千葉県立美術館長 米田 耕司

美術館の誕生

この春、3年振り4度目の千葉県立美術館勤務となりました。魅力ある美術館づくりに邁進いたします。どうぞよろしくお願い申し上げます。

想えば昭和46年(1971)春に美術館の設置準備の担当者となって以来、昭和49年(1974)の開館など様々な思い出がある美術館です。この32年間は、高度経済成長による社会の急激な変化とそれに続くバブル崩壊以後の経済不況の苦しい中で21世紀を迎えました。大きな時代の曲がり角に立って、一方では少子高齢社会というわが国はじまって以来の新しい時代に突入しました。このような時代だからこそ、生涯学習社会の実現をめざす、美術館をはじめとした芸術文化への県民の皆さんの熱い期待を実感しています。

なぜなら、この熱い思いは美術館の誕生以前から続いているものだからです。昭和20年代からはじまった県民のみなさんによる県立美術館開設運動が、戦後の復興と近代化の中で、昭和40年代に建設促進の署名運動となり、県と県議会への粘り強い陳情活動によって誕生したのが、現在の千葉県立美術館だからです。

美術館力

「美術館力(=博物館力)」の基本はやはり収蔵資料の質と量が重要です。昭和46年(1971)に私が美術館設置準備の担当になった時にはたった25点しかなかった美術作品も現在2千数百点になりました。今では収蔵資料だけで企画展が沢山できるようになりました。この他にも、画家の手紙やスケッチブックなど関係資料が約2千点あります。これらの資料は県民のみなさんの共通の財産です。私たちはこれらのコレクションを守り、成長させていきます。「美術館は地球の芸術文化の拠点であり、質の高い生活に果たす役割は大である」という言葉もありますが、その基本はコレクションがあればこそです。

これらのコレクションは歴代館長以下職員の努力と、作品を提供して下さった方々の御理解・御協力と、さらには収集活動を理解し継続して下さった県及び県教育委員会の支援の賜物です。

美術館にはこれまでの活動実績が収蔵資料とともに蓄積されています。「調査・研究」「収集・保存」「展示を中心に教育・普及」の各事業の三位一体が美術館力です。私たちはこれまでの蓄積を基礎に県民のみなさんの自己学習を支援して参る

所存です。

開館30周年を前に

そこで来年、平成16年(2004)に開館30周年を控えている現在、私たちの県立美術館はどの様にして生まれ、どのように育ち、そしてこれからの困難な時代の中で未来へ向かって「伝統と創造」の拠点としてどうあるべきか。生涯学習を通して県民の皆さんと子孫に奉仕したいという美術館職員の想いを、5月下旬に館の職員全員で、設置準備の時代の構想と理念、これからの美術館の在るべき姿について、当時の資料をもとに勉強会をしました。

昭和43年(1968)11月の県立博物館設置構想(ネットワーク構想)は県内数ヶ所に地域の特性を生かした専門性を有する博物館を設置し、中央にセンター機能をもつ博物館を設置して、相互に関連をもたせながら全県的な博物館網を形成するという構想で、今日の生涯学習社会を先取りした構想として全国的に高い評価を受けています。

千葉県立美術館設置構想は46年(1971)3月に策定されました。上記の博物館設置構想の設置計画では、県立美術館の性格は「芸術資料の常設はもとより、常に生きた動的活動の中軸とする事業センターとする。創作を行いうるアトリエ等を備え、県民が積極的に利用できる美術館とする。」と書かれています。全国に例のない県民アトリエ(1502㎡)や美術館の「みる・かたる・つくる」のスローガンはこの設置構想の具体化そのもののなのです。

少子高齢社会の中で

今、県立美術館は学校教育と力を合わせ学社連携、博学融合を目標に事業を展開し、生涯学習社会の実現に向けて全力をあげて取り組んでいます。

子どもたちの未来を考えて、自分の頭で考えることができるように、生きる力を育み、個性豊かな人生を実現するための手助けができる多彩なプログラムの展開を行っています。「こどものための展覧会」やいろいろなワークショップなどを積極的に展開しています。

また、今年から美術館は県立八街高等学校の設置する総合学科の授業の充実に協力して博学融合理念に基づいて、美術館と高校が相互連携して「美術館講座」を開設しました。4月から美術館の学芸職員8名が一年間を通して高校生たちと美術館の使命や仕事についての指導のため学校に出向いたり、生徒が美術館で実習したりしています。子どもたちが美術文化への関心を深め、感性を高め生涯にわたって美術を楽しむ心を醸成してほしいと願っています。また、この事業を通して八街高校の教員4名が土日の休日を利用し、美術館のボランティア活動に参加してくれています。

同時にこれまで以上に高齢者の方々の美術館事業への参加を拡大したいと考えています。魅力ある企画を用意し、子どもから高齢者まで、一人ひとりのニーズにあった活動を展開していきます。

県立美術館は県民のみなさんのものです。みなさんに支えられて、これからも成長していきます。引続きご支援くださいますようお願い申し上げます。



収蔵作品による企画展「樹」

8/30(土)～10/5(日)

企画展「樹」を上記の日程で32日間にわたって当館第1・2展示室において開催します。

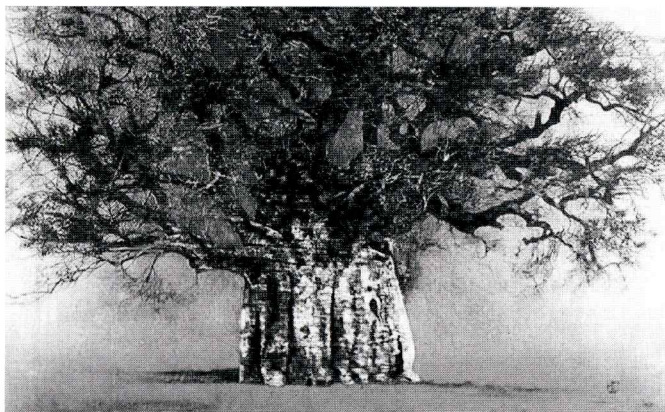
この展覧会では、樹木を題材とした作品や樹木から作られた日本画、洋画、版画、彫刻、工芸作品などを展示します。画家が描いた樹木の表現をご覧いただいたり、樹種によって異なる木彫の風合いや香りなどを体験することができます。

ここでは、展示作品の中から、樹をモチーフとした作品の多い、版画家星襄一と、洋画家原勝郎、そして、楠を使った木彫制作を生涯貫いた長谷川昂の作品を選んで見どころなどをご紹介します。

「王の樹」

作者の星襄一は、大正2年生まれ。昭和21年に郷里の新潟に引き上げるまで台湾で小学校教師をしていました。帰国後は再び教職には就かず、孔版印刷（ガリ版印刷）で生計を立てながら、孔版画の技術を習得し昭和23年に日本版画協会の展覧会に初入選します。その後昭和31年に武蔵野美術学校を卒業し、木版画を独学ではじめます。国画会展のほか、東京国際版画ビエンナーレ展など海外展でも活躍しました。孔版画時代は具象、美術学校卒業後木版をはじめてしばらくは抽象画、その後自らの苗字である星や星座を題材にし、さらに樹を主題とする作品を手がけるようになります。版画の製作技法は、鎌や鉄筆さらにはガスバーナーの焰をノミの代わり使うという独創的なものです。

「王の樹」は、昭和51年の作品です。太い幹から四方八方に屈曲して伸びる枝は、作家の郷里にそびえていたという大ケヤキの姿をイメージしたのかもしれませんが。主版に金箔を置いて版数多く刷り重ねられた作品で、深みのある色彩が特徴です。



星 襄一「王の樹」

「樹」

作者の原勝郎は、明治22年生まれ。山武郡大網白里町の出身で、ハワイからアメリカに渡り、さらにフランスのパリに移って20年間を過ごし、サロン・ドートヌヌ、サロン・デ・ザンデパンダンに出品し活躍しました。昭和

和14年、第2次大戦勃発のため、邦人引き上げ船で急遽帰国しました。帰国後は、新樹会展を中心に活動し、日本国際美術展、現代日本美術展等に招待出品しました。

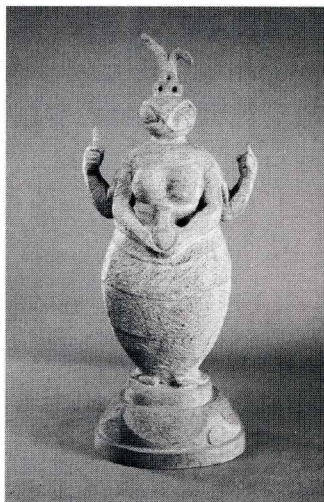
この作品は、昭和30年の制作です。この年にはほかにもほぼ同様の樹木や林を主題とした作品が描かれています。夫人の回想によると原勝郎は、「土から伸びる生き物を描きたい」「土から自然に伸びていく樹が立派だ」ということを常々語っていたということですから、樹や森は作家にとって大好きなモチーフだったようです。勢い良く天に向かって伸びる太い枝ぶりの椎の木姿から、みずみずしさを感じることができます。



原 勝郎「樹」

「花の国の母神」

作者の長谷川昂は、明治42年生まれ。鴨川市の出身で、幼いころ祖父から「お前は、椎の木から生まれてきた」と聞かされて育ち、次第に木に対する親しみを持つようになったそうです。昭和6年に上京し佐々木大樹、内藤伸に師事します。昭和39年に東京湾観音が完成すると、一躍長谷川昂の名前が世に知られるようになります。長谷川の木彫は、鉈彫りと呼ばれる技法で仏像や子供の像を好んで制作しています。「鉈彫りは何十万回対象に刃を打ち込み奥深く憶念を刻む祈りである」と本人が述べるように、石器時代の斧を参考に作家自身が改良を加えて作った鉈で丹念に彫られています。その作品の表面の丸みからは独特のぬくもりと愛情が感じられます。



長谷川 昂「花の国の母神」

この作品は昭和36年の制作で、作家得意の楠を素材にしていますので近づくといかに木の香りがします。女王蜂をモチーフとする彫像は、作家が創造した蜂の神様の姿で、どこことなくユーモラスな親しみやすい姿をしています。頭には触覚、手には蜂蜜の壺と蜂針、大きなおなかや腰は健やかな子供をはぐくむ生産性を象徴しています。

(学芸課 高橋 寛)

子どものための展覧会 7/19(土)～8/24(日)

「こどものための展覧会」では、毎年こどもたちが美術作品や美術館に親しみを持てるように、「みる」活動と共に「つくる」「かたる」などの活動が体験できるよう構成しています。今年は、さまざまな視点から作品を鑑賞できるように、意外と思われるような素材や表現方法が取り入れられている4人の作家の作品19点を展示しています。次に4作家の紹介をします。

和泉聡志(1961～)の作品は、石とステンレススチールや真鍮などを組み合わせ、不思議な空間を生み出している作品です。その不思議な空間は、何気なく観ていると見過ごしてしまいそうです。しかし、じっくりとみると仕掛けのあることに気づきます。どんな仕掛けがあるのかぜひみつけてください。

鐵岩隆(1965～)の作品は、石の重量感が感じられます。そして、さまざまな形が彫りつけられた石は、それぞれの表情があり、ひとつひとつに「生命」が吹き込まれたようです。また、最近は、石だけでなく他の素材での表現を試みているそうです。そのひとつとして布を素材とした作品が展示されています。

今回は、石を素材に制作する作家が二人いますが、同じ石を素材にしても個性豊かな表現から様々な発見があることと思います。



【展示風景】

永田哲也(1959～)の作品は、紙を素材とした彫刻です。手すき和紙の特性を生かし、型取りという技法を用いてさまざまなものの形状やテクスチャーを写し取って新たな形をつくり出しています。その作品は、和紙とは思えない堅牢さを持ち、紙がもつ表現の豊かさを教えてください。

浜口陽三(1909～2000)の作品は、メゾチントという銅版画の技法を中心に用いています。メゾチントは、銅板にベルソという用具で細かな点を刻み、その点に黒、赤、黄、青などのインクをつめて刷っていく技法です。レモンやさくらんぼなど身近なものを描いた作品ですが、それぞれの作品は、見るものへ静かに語りかけているようで、じっくりと見入ってしまいます。

展覧会期間中、作家と一緒にワークショップを行いました。鐵岩隆氏とともに石を素材にした創作体験、永田哲也氏とともに和紙の創作体験に多くの子供達が参加しました。

ワークショップ

本館では、美術館でしか味わえないエネルギーで躍動的なワークショップ(創作体験)を開催しています。

今年はすでに、2回のワークショップが終了しましたが、9月から始まる「アート全開! わくわくワークショップ」の詳細をご紹介します。

『ういた? ういたの～バルーンアート!』

宙にうく「フニャフニャオブジェ」の創作です。名づけて「空飛ぶワークショップ」のはじまり～はじまり～

- 日 時 9月21日(日) 13:00～15:00
- 会 場 千葉県立美術館 第7展示室
- 参加費 500円(保険料/材料費等)
- 対 象 小～高校生【定員40名程度】
- 申込締切 9月13日(土) 必着

『モノレール千葉駅を 秋色コーディネート』

千葉都市モノレール千葉駅の通路の壁を、カッティングシートを使って、みんなで秋色にコーディネート。

- 日 時 10月19日(日) 13:00～15:00
- 会 場 千葉都市モノレール「千葉駅」構内
- 参加費 500円(保険料/材料費等)
- 対 象 小～高校生【定員60名程度】
- 申込締切 10月11日(土) 必着

『色・色まわる風車? ポートパークに出現!』

いろいろな色をつけた風車を作ります。風で回ると「あら不思議..」科学と芸術が合体した野外ワーク。

- 日 時 11月16日(日) 10:00～12:00
*雨天の場合は23日(日) 24日(月) 順延
- 会 場 千葉ポートパーク円形広場
- 参加費 500円(保険料/材料費等)
- 対 象 小～高校生【定員50名程度】
- 申込締切 11月10日(月) 必着

【上記のワークショップ申込方法】

往復はがきに、参加希望ワークショップ名/住所/氏名/電話番号/学校名/学年を記入し、千葉県立美術館ワークショップ係まで。なお、応募者多数の場合は抽選となりますのでご了解ください。各締切日必着。

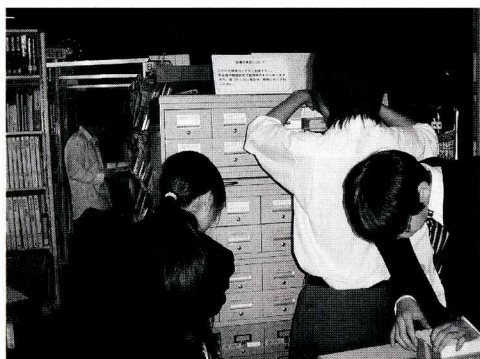


5月に開催したワークショップ
【美術館の壁にウォールペイントⅢ】より

八街高校「美術館講座」について

本年度より、博学連携の理念に基づき、千葉県立八街高等学校の設置する総合学科の授業の充実に協力するため、美術館と高校が相互連携して「美術館講座」を開設しました。4月から美術館の学芸職員8名が一年間をとおして、当該講座選択者10名の指導のため当該高校に出向いたり、生徒が美術館で実習したりしています。

当講座の内容は、美術館の役割や使命、学芸員の仕事を学び、さらに理解を深めるために、実際に本館の収蔵作品の中から生徒個々が興味・関心のある作品を選定し、調査・研究を行い、情報の発信の仕方や美術工芸品の取り扱いを体験し、最終的にはその成果を発表するため、1月16(金)～1月18日(日)に本館にて当該高校生による展覧会を行います。



【作品について調べる生徒たちの様子】

学校巡回展について

世界の優れた美術品を鑑賞できる機会を提供するとともに、小・中学生の情操のかん養に資することを目的とし、「美術館がやってきた」をテーマに、名画の複製画を巡回展示する計画です。

今年度は、印旛地方出張所管内の小・中学校を対象に、小学校2校(栄町立安食小学校、富里市立洗心小学校)、中学校1校(佐倉市立佐倉中学校)を開催校として実施します。

実施日程については下記の通りです。

学校名	展示作品	展示期間
富里市立 洗心小学校	バルビゾン派から 後期印象派まで	9/25(木) ～10/8(水)
栄町立 安食小学校	バルビゾン派から 後期印象派まで	10/10(金) ～10/22(水)
佐倉市立 佐倉中学校	バルビゾン派から 後期印象派まで	10/24(金) ～11/5(水)

また、巡回展の開催中にギャラリートークを希望する学校については、期間中の一日を利用し実施する予定にしています。

版画講座

昨年度より国際版画交流協会会員の上田靖之先生を講師として、木版画の基礎的な技法や表現方法を修得する講座を展開しています。

今年度は木版画に銅版画を加え、更にバラエティーにとんだ講座を展開しようと考えています。経験者、未経験者を問わず、誰でも楽しく参加できる講座です。

〈日程〉10/30.31 11/1.6.7.8.11.13.14.15の全10日間

〈定員〉20人を予定

〈費用〉14,000円の予定

〈申込方法〉往復はがきに、希望講座名、住所、氏名、電話番号を記入して下さい。

〈申込締切〉10月15日

美術めぐりの旅

千葉県立美術館主催の「美術めぐりの旅」は、浅井忠を育てた佐倉の町をご案内します。佐倉は、九州の長崎と同じように蘭学を学ぶことのできる進んだところとして、西の長崎・東の佐倉といわれました。

藩主、堀田正睦が、蘭方医の佐藤泰然を佐倉に招いて「順天堂」という病院を開業させたからです。浅井忠の父は、堀田正睦に仕え佐倉藩の将来をになう人物の一人として期待されていました。いくつかの記念館を訪ね、当時の浅井忠少年と出会えるような旅を企画したいと思っています。

(11月実施予定)

レストラン・ミュージアムショップがリニューアル

2003年の4月からレストランが少しおしゃれになりました。レストラン「白ゆり」の人気メニューは、日替わり弁当とクリームあんみつです。ビールと抹茶アイスもメニューに加まりました。芸術鑑賞とセットで、ゆったりとしたひとときを楽しまれてはいかがでしょうか。

また、お帰りの際には、ミュージアムショップ前のガラスのショーケースをのぞかれてはいかがでしょうか。素敵なミュージアムグッズが、あなたをお待ちしています。

